OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析
Author(s)	高, 娟
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 64-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71148
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析

高　娟

1　はじめに

本稿で扱う日本語複合動詞（以下は複合動詞と略する）とは、「取り上げる、使い分ける」などのように前項動詞の連用形の後ろに後項動詞が結合したものである。

確かに、複合動詞はおびただしい日本語の語彙の中のほんの一部でしかない。しかし、影山（2012）は、日本語の特に複合動詞の理論的・実証的研究が、一般社会と研究者社会に何かを提供できるのではないかということを示唆している。また、日本語学習者にとって、複合動詞は学習困難な項目であることが指摘されている（姫野 1975、田中 2004、畠山 2008）ので、日本語習得の研究において複合動詞についての研究を行うのは有意義なことであろう。

日本語教育においては、複合動詞をいかに指導すべきかを探るには、まず学習者の使用状況の把握が必要になると思われる。どのように複合動詞が使用されているか、どのような誤用傾向があるかなど、学習者の複合動詞の使用状況に対する実態調査は複合動詞の習得研究の体系の中でもっとも基礎的で重要だと考えられる。

本稿では日本語教育現場での複合動詞のよりよい指導のため、作文コーパスにおける中国語母語話者の複合動詞の誤用を分析することを通じて、学習者の複合動詞の使用状況の一端を明らかにすることを研究目的とする。

2　先行研究と本稿の位置づけ

これまでの複合動詞に関する研究は、言語学の視点からのアプローチが圧倒的に多いが、言語学の理論を日本語教育現場に生かし、第二言語習得の視点からの複合動詞の研究が近年注目されてきた。

複合動詞の習得に関する研究では、コーパスを利用して学習者や母語話者の使用実態に関する研究（陳 2008、高 2014）、使用頻度の高い後項動詞についての量的考察、後項動詞の類似表現についての研究（田中 2004、張 2010、村田 2013）、認知言語学の視点からの複合動詞の習得研究（松田 2004、松田・白石 2008）などがある。しかし、今までの複合動詞の習得研究は、複合動詞の教育現場での指導に応用しにくいことや、研究者が教育経験に頼って複合動詞の研究を決めるのが一般的であることや、複合動詞の習得考慮に母語の影響を入れていないことなどの指摘も挙げられる。

以上の問題点を解決するには、学習者の複合動詞の使用状況を明確にする必要があると考えられるが、それについてはまだ十分には検討されていない。学習者の複合動詞の使用状況を把握し、具体的な問題点を明確にした上でその解決方法を見つけるのが本稿の目的

である。調査方法としては過去様々に試みられてきたが、本稿では学習者の複合動詞の誤用を分析する方法を採用する。

3　研究方法

3.1　コーパス概要

本稿で考察対象とするコーパスは上海交通大学外国語学部の張建華氏によって開発された『日語学習者書面語語料庫』（以下：作文コーパスと略称）である。このコーパスの総文字数は 1,127,709 字で、その中には JFL 環境にいる 319 名の日本語学習者によって書かれた計 1,826 本の作文が収録されている。検索は 2017 年 10 月から 2018 年 2 月にかけて行った。

学習者は上海交通大学、上海外国語大学、上海師範大学、東北師範大学、南開大学の、五つの大学の日本語専攻の学生で、学年は大学 2 年から大学 4 年までそれぞれである。また、収録された作文の形式はほぼテーマ作文である。

3.2　複合動詞の分類

影山（1993）は生成文法の立場から「概念意味論（Conceptual semantics）」の枠内で「語形成」という観点から複合動詞を扱い、複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の二種類に分類した。

この分類は言語学の分野に影響を与え、その後の影山（1996）、影山・由本（1997）、由本（1996）では、この分類に基づいて考察が加えられている。また、日本語教育の分野でも基本的に影山（1993）の複合動詞の二分類という考え方に立脚し、その習得研究を行っている（畠山 2008、張 2010、高 2014）。

本稿では、上述の複合動詞の分類方法を踏襲し、複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に分け、その誤用の要因を分析する。

3.3　研究課題

本稿では、作文コーパスから複合動詞の誤用例を抽出し、JFL 環境にいる中国語母語話者の複合動詞の誤用状況を具体的に考察する。研究課題は以下の 2 つである。

研究課題 1：作文のテーマや学年別に学習者の誤用状況を考察する。

研究課題 2：学習者の複合動詞の誤用状況を量的に考察した上で、どのような複合動詞を頻繁に誤用するのか、誤用するならばどのような誤用パターンが頻出するのかを具体的に考察する。

3.4　研究手法

当該コーパスには、未修正のままの作文データと、母語話者による添削を行った誤用タ

グ付きデータという 2 つのバージョンがある。本稿では、母語話者による添削を行った誤用タグ付きデータを対象に複合動詞の誤用データを抽出した。

まず、抽出された複合動詞のデータを未修正のままの作文データと照らし合わせ、その修正案をもう一度日本語母語話者 3 名に判断してもらった。その結果、データの中で修正案が不自然な誤用例は 4 例だった。それら 4 例には、新しい修正案を日本語母語話者 3 名に記してもらい、誤用例の中に付け加えた。その後、誤用例中に用いられた複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞とに分け、量的分析を行い、さらに誤用の要因を分析した。

4　作文のテーマと学年別についての考察

コーパスの検索条件を「語彙錯誤―複合動詞」に設定して抽出されたデータを日本語母語話者に判断してもらった結果、全部で 119 例の複合動詞の誤用例があった。

4.1　作文のテーマの影響

陳（2008）では、作文対訳コーパスにおける母語話者と学習者との複合動詞の使用状況を考察し、複合動詞の使用は作文のテーマに大きく左右され、作文のテーマの違いを考慮して複合動詞の使用状況を検討する必要があると指摘している。例えば、陳（2008）の扱ったデータでは、「吸い込む」「吸い始める」は「たばこ」がテーマである作文には使用上位項目に入るものである。

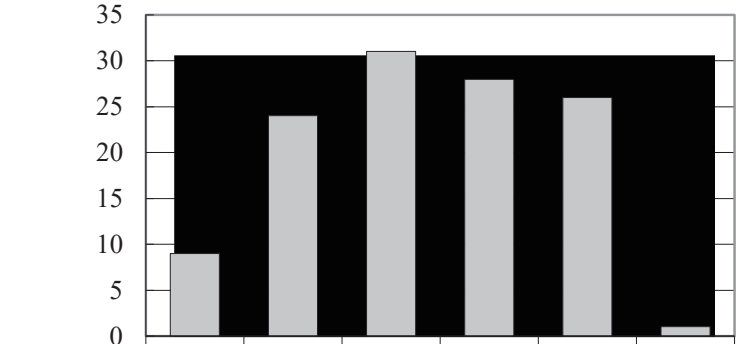
作文のテーマの違いが複合動詞の誤用例に影響を及ぼす可能性があることを考慮に入れ、本稿で扱われていた誤用例が起こった作文テーマについて考察を行った。作文のテーマは「日本語学習と私」、「友情について」、「中日関係について」、「北京オリンピック」、「尊敬する人」、「私の夢」、「未来の事」など様々である。複合動詞の誤用例が起こっていた作文テーマは多岐にわたることが見られた。

それゆえ、複合動詞の使用が作文のテーマに大きく左右されるという指摘は、今回の誤用例については適応されないと考えている。

4.2　学年別の誤用例数

学年別に分けて抽出されていた複合動詞の誤用例を量的に考察した。誤用例に関する学習者の日本語学習年数の内訳はグラフ 1 を参照のこと。

グラフ 1 からわかるように、今回収集された複合動詞の誤用例は、ほぼ中国の大学 2 年後期から 4 年前期まで、即ち日本語の中級学習段階から上級学習段階までに集中している。



	2：前	2：後	3：前	3：後	4：前	4：後
□誤用例数	9	24	31	28	26	1

（グラフ 1　学年別の誤用例数）

中級段階に入った日本語学習者は、既習知識の増加に伴い、語彙の使用や日本語の表現が豊かになりつつある状態だといえる。特に作文を書く場合、学習者が自分の意思を十分に伝えるために既習知識を生かし、より多様な語彙や文法表現などを使用する。

その際、これまで蓄えられてきた語彙力の発揮することはもとより、初級段階よりも複合動詞の使用が多くなる。それにつれ、複合動詞の誤用も多く出現してくると考えられる。そのような背景がある以上、今回のデータからは、中級レベルまたそれ以上の学習者の複合動詞の使用状況にはどのような問題があるのかが把握できると考えられる。

5　誤用例についての考察

作文コーパスの中から複合動詞の誤用例を全部で 119 例収集できた。抽出された複合動詞の誤用例を整理し、a）統語的複合動詞の誤用、b）語彙的複合動詞の誤用、c）複合動詞の不使用、d）勝手な造語などの 4 つの誤用パターンを分けて考察を行った。

5.1　統語的複合動詞の誤用について

統語的複合動詞の場合には全部で 35 例の誤用例が見られ、総誤用数の 119 例に対して 29%を占めている。後項動詞別に統語的複合動詞の誤用例を整理した結果、学習者による誤用は「～はじめる」、「～つづける」、「～あう」、「～すぎる」、「～だす」などの後項動詞に集中される傾向が見られた。誤用例を多い順に並べると、表 1 となる。

表 1 で示しているように、「～はじめる」の誤用数が最も多く、統語的複合動詞の総誤用数 35 例に対して半分以上を占めている。次いで「～つづける」を後項動詞とする統語的複合動詞の誤用数は 8 例で、22%を占めている。「～はじめる」、「～つづける」という複合動詞の後項動詞は初級段階の学習項目で、語彙の特徴としては意味的透明性が高く、学習者にとってその使用は比較的容易であると思われるが、一方、誤用例数が多くてよく間違える項目だともいえる。

NO	後項動詞	誤用例数
1	～はじめる	19 例
2	～つづける	8 例
3	～あう	4 例
4	～すぎる	3 例
5	～だす	1 例

（表 1　後項動詞別の誤用例数）

統語的複合動詞の誤用例においては、後項動詞の自他動詞の誤用が顕著である。「～はじめる」の誤用例 19 例のうちに 9 例が「＊～はじまる」に、「～つづける」の誤用例 8 例のうちに 7 例が「＊～つづく」と誤用している。例 1 と例 2 がその誤用例である。

1）自分で本を買って、テープを聞きながら**＊勉強し始まった**（→勉強し始めた）が、ただ基本的なことをちょっとだけ習った。（3：後、『日本語学習と私』）

2）一人の 20 代の女の子だった。活発的な人みたいで、私と話しながら、万里の頂上を**＊登りつづいた**（→登りつづけた）。（3：前、『相知＋理解＝未来』）

また、「～はじめる」の誤用例の中で、「～ようになる」と「～はじめる」の使い方を混同してしまい、下記の例 3 と例 4 のように誤用している。というのも、「～はじめる」を中国語で訳すと「开始～」となるため、学習者は「开始占有（重要的位置）」（例 3）、「开始互换（邮件）」（例 4）の意味を表すために「＊占めし始めました」、「＊交換し始める」という誤用を犯している。この場合は、母語の影響が誤用の要因ではないかと考えられる。

3）その電話の後から、先生は私の人生の中で大切な位置を**＊占めし始めました**（→占めるようになりました）。（4：前、『尊敬する人』）

4）彼女はすぐ日本へ帰って、私とメールを**＊交換し始める**（→交換するようになった）。（3：前、『中日関係について』）

先行研究の中で、同じく開始のアスペクトを表す「～はじめる」と「～だす」についての類義研究がよく見られるが、後項動詞「～はじめる」と文型の「～ようになる」に関する誤用分析は管見の限りほとんどなされていない。データをさらに収集し、学習者の誤用表現としての今後の研究課題となることが期待される。

5.2　語彙的複合動詞の誤用について

語彙的複合動詞の誤用例が一番多く、全部で 65 例である。総誤用数の 119 例に対して 55%を占めている。

語彙的複合動詞の誤用パターンはかなりばらつきが見られた。語彙的複合動詞の生成には文字表記の問題や格支配の間違いや活用の問題があるにもかかわらず、そのような誤用はそれほど多くなかった。誤用例の中で例 5 と例 6 のように語彙的複合動詞の意味を間違え、或いは意味を十分理解できない誤用例が相当量存在した。これは、統語的複合動詞より語彙的複合動詞のほうが意味の多義性が高いので学習者の意味理解に支障をきたすからではないかと考えられる。

5）ショッピングをするとき、お互いに意見を**＊持ち出します（→言い合います)**。(4：前、『友情について』)

6）黒沢明の幻想的な『夢』とか、水野武が描く究極の残酷で美しい『ドールズ』とか、宮崎駿監督の『もののけ姫』とか、そんないろいろなすばらしい映画が日本語への興味を**＊引き起こしました**（→呼び起こしました)。(3：後、『日本語学習と私』)

語彙的複合動詞の誤用例の中で、特に複合動詞の過剰使用による誤用例が半分を占め、圧倒的に多い。分析の結果、誤用の要因は、例 7 のように母語の影響で「说出（说：言う、話す；出：出す、出る)」を直訳して「言い出す」を使ってしまったり、例 8 のようにテキストや辞書での記述が不十分（「問い合わせる」の意味を簡単に「动词；问，问询」と提示する）なので、語彙の意味を十分理解できなかったりするからだと結論付けられる。

7）私たちは本当の日本語の環境にいませんから、中国語的な日本語を**＊言い出す**（→口にする）かもしれません。(3：後、『日本語学習と私』)

8）もう一度自分の心を聞き、生命は本当に価値のないものか、自分の生き甲斐は何かと自分の心**＊と問い合わせて**（→に問うて）ほしい。(3：前、『輝く生命』)

5.3　複合動詞の不使用について

今回のデータ中、「複合動詞の不使用」の誤用例は少なく、5 例にしか過ぎない。しかし、複合動詞の誤用状況の調査においては非常に重要な誤用パターンであるといえる。

下記の誤用例を見てみると、学習者が単純動詞を複合動詞の代わりに使用したために、作文の中で述べたい内容を十分表現できていない。これは、学習者が単純動詞のみの使用で意味が通じてしまう、或いは意味が適切に表現できると認識しているため、複合動詞をそれほど多く使用できないためだと考えられる。

9）毎日仕事に**＊回され**（→ふり回され)、仕事の悩みからうつになっている父を見ると、

心配だ。（2：後、『タイムマシンがほしい』）

10）お父さんは最後殺されてしまったが、息子はお父さんが想像した世界で楽しく**＊生きてきた**（→生き抜いた）。（3：前、『「やまなし」感想文』）

5.4 勝手な造語について

「勝手な造語」の誤用例が全部で 14 例であった。考察した結果、学習者が母語の影響で、日本語の語彙に存在しない複合動詞を造語する傾向が見られた。その中でも、14 例のうち 9 例が、下記の例文のように、中国語の影響で造語したものである。例えば、学習者は例 11 では中国語の「互相学习（互相：お互いに；学习：習う）」を「＊習い合う」に、例 12 では「说出（说：話す/言う；出：出る）」を「＊言い出る」と造語している。

11）アジア文明圏に属する日本と中国はお互いにいろいろと**＊習い合った**（→影響を受け合った）であろう。（3：前、『未来の事』）

12）他人の間違ったことに抗議して、はっきり**＊言い出た**（→意見を言った）ことが多かった。（2：前、『失われつつあるもの』）

6 おわりに

本稿の調査により、網羅的に中級レベルまたそれ以上の学習者の複合動詞の誤用状況を考察し、中国語学習者による間違えやすい複合動詞の誤用パターンを把握することができた。

統語的複合動詞の誤用パターンとしては「～はじめる、～つづける、～あう、～すぎる、～だす」など 5 つの後項動詞に集中する傾向があり、語彙的複合動詞の誤用はかなりばらつきが見られた。また、中国語からの母語干渉の要因を考察し、母語の影響による複合動詞の造語、及び母語の影響による複合動詞の過剰使用ということが圧倒的に多いという傾向が見られた。

今後の課題としては学習者の間違えやすい統語的複合動詞の後項動詞に注目し、その使用状況を調査すると同時に、対照言語学の理論を踏まえ、母語の影響による語彙的複合動詞の誤用要因を具体的に調べることがある。また、誤用のデータをさらに収集し、誤用例を増やして学習者の誤用状況を考察していくことも今後の課題の一つといえる。

（本稿は、「第十回中日対照言語学シンポジウム」（中国・蘇州大学 2018 月 8 月 19 日）の口頭発表に基づいて加筆・修正したものである。）

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論―言語と認知の接点』くろしお出版
影山太郎・由元陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社
影山太郎（2012）「語彙的複合動詞の新体系―その理論的・応用的意味合い」『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』ひつじ書房　pp.3-45
高娟（2014）「日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察」『日本語・日本文化研究』24　大阪大学大学院言語文化研究科　pp.104-114
田中衛子（2004）「類義複合動詞の用法一考―日本語教育の視点から」『言語と文化』10　愛知大学語学教育研究室　pp.63-79
張威（2010）「高校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析―第二言語習得ストラテジーの改善をめざして」『岩大語文』第 15 号　岩手大学語文学会　pp.73-89
陳曦（2008）『第二言語としての日本語複合動詞の習得』中国社会科学出版社
松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究―認知意味論による意味分析を通じて』ひつじ書房
松田文子・白石知代（2008）「コア図式を用いた意味記述の試み―複合動詞「ひっかける」を事例として」『表現研究』87　表現学会　pp.51-61
村田年（2013）「社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として」『日本語と日本語教育』41　慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター　pp.67-95
畠山衛（2008）「『茶漉し』による書き言葉の中の複合動詞の分析」『15th Princeton Japanese Pedagogy Forum Columbia University』Princeton Japanese Pedagogy Forum Columbia University　pp.19-33
姫野昌子（1975）「複合動詞・「～つく」と「～つける」」『日本語学校論集』2　東京外国語大学附属日本語学校
由本陽子（1996）「語形成と語彙概念構造」『言語と文化の諸相』英宝社　pp.105-118